



公益財団法人 山階鳥類研究所

## アホウドリ 2022-23年の繁殖期の繁殖状況

### 伊豆諸島 鳥島全体で確認されたヒナの数 が初めて1,000羽越え 小笠原諸島 鷺島むとじまの新繁殖地では 昨年に引き続き2羽のヒナが孵化

伊豆諸島鳥島（環境省からの委託）及び小笠原諸島鷺島※（東京都小笠原支庁からの委託）におけるアホウドリ繁殖状況のモニタリング調査の結果、

- ・ 伊豆諸島鳥島全体で2022-23年の繁殖期に確認された総ヒナ数は1,088羽となり、初めて1,000羽を越えました。
- ・ 鳥島アホウドリ個体群は概ね7,900羽以上まで回復したと評価されました。

- ・ 小笠原諸島鷺島の新繁殖地では、昨年に引き続き2羽のヒナの孵化が確認されました。
- ・ 鷺島のヒナのオス親はいずれも鷺島生まれ（伊豆鳥島から移送し鷺島で人工飼育した個体が産んだ子）で、ヒナは第3世代にあたります。
- ・ アホウドリは通常、巣立ち後3-5年で出生地に戻り、ペアリングし、繁殖する習性を持ちます。鷺島から巣立った個体は2022～23年の繁殖期までに4羽帰還したことが確認されており、そのうち2羽が繁殖に成功しています。

- ・ 今後の課題として、近年、尖閣諸島のアホウドリは鳥島のアホウドリと別種で、それぞれの独自性を保つように保全する必要があることが判明し、アホウドリはこれまで考えられてきたより希少な種となることから、引き続き動向をモニタリングする必要があります。

※小笠原諸島鷺島での新繁殖地形成事業は、（公財）山階鳥類研究所が、環境省、東京都、米国魚類野生生物局、三井物産環境基金、公益信託サントリー世界愛鳥基金等の支援を得て、国の特別天然記念物であり絶滅危惧種であるアホウドリの保全のため、小笠原諸島鷺島に新しい繁殖地を形成する目的で、伊豆諸島鳥島のヒナの移送（2008～12年）と音声とデコイによる誘引（2007年～22年）をし、モニタリング調査を実施しているものです。

#### 伊豆諸島鳥島

1. 島内にある3カ所の繁殖地（コロニー）
- ・ 燕崎：1951年にアホウドリが再発見された時から続く従来からのコロニー。南東部の急斜面でほとんど砂だけの斜面に営巣する。堆積した火山性の土砂からなる表土がつねに流れ落ちており、卵やヒナが巣から転がり出たり埋まったりする事故が多い。
  - ・ 初寝崎：島西部の草の生えた緩斜面に形成されたコロニー。デコイ（模型）と音声装置による誘引を1992年から実施し、1996年に初めてヒナが巣立った。2006年に13羽のヒナが巣立ったことで誘引装置の設置は終了した。表土が流れ落ちないなど環境条件がよく、繁殖成功率も安定している。



写真：伊豆鳥島の初寝崎繁殖地のアホウドリのヒナ（2023年3月4日撮影）





聾島におけるアホウドリの繁殖地



アホウドリの移送個体（メス、色足環番号 赤色 Y31）とその子（2023年3月12日撮影）



今年生まれの2羽のアホウドリと成鳥（2023年4月26日撮影）

聾島及び周辺の島におけるこれまでのアホウドリの繁殖状況

繁殖シーズン	聾島	媒島	嫁島
		(聾島から7km南)	(聾島から22km南)
2012-13年	1卵(孵化せず)		
2013-14年	1卵(孵化せず)	1ヒナ巣立ち	
2014-15年	1卵(孵化せず)	1卵(孵化せず)	
2015-16年	1ヒナ巣立ち		1ヒナ巣立ち
2016-17年	1ヒナ巣立ち		
2017-18年	1ヒナ巣立ち + 1卵(孵化せず)		
2018-19年	1ヒナ巣立ち + 1卵(孵化せず)		
2019-20年	1ヒナ巣立ち + 1卵(孵化せず)		
2020-21年	1卵(孵化せず)		
2021-22年	2ヒナ巣立ち		
2022-23年	2ヒナ巣立ち前 + 1卵(孵化せず)		

\*アホウドリは11月に産卵し、雛は翌年1月に孵化し5月に巣立つため、繁殖シーズンは年をまたぐ

この件についての問い合わせ先

※写真のデジタルデータをご希望の方もお問い合わせください。

山階鳥類研究所研究員 富田直樹  
eメール: tomita@yamashina.or.jp  
Tel.04-7182-1107

研究員 油田照秋  
eメール: yuta@yamashina.or.jp  
Tel.04-7182-1107

## < 参考 >

### アホウドリ (*Phoebastria albatrus*)

ミズナギドリ目アホウドリ科。特別天然記念物、国内希少野生動植物種（種の保存法、1993年指定）、絶滅危惧Ⅱ類（環境省レッドリスト2020）

#### 分布及び個体数

- ・繁殖地は、日本の伊豆諸島鳥島（以下、鳥島）と尖閣諸島（※近年、鳥島と尖閣諸島の個体群は別種と考えるべきという研究成果が出ていることは後述）
- ・非繁殖期には、北太平洋のベーリング海やアリューシャン列島、アラスカ沿岸まで移動する。
- ・1949年の調査で一度絶滅したと考えられたが、1951年に約10羽が鳥島で再発見された。1971年には尖閣諸島で少数の生息が再発見された。
- ・減少原因は、1890～1900年代に羽毛採取のために大量に捕獲されたことによる。
- ・保全活動の成果などもあり、現在個体数は約7,900羽以上（尖閣個体群は除く）まで回復したと推定された（本文参照）。

#### 形態及び生態

- ・成鳥は全長が84～94cm。
- ・成鳥は全体的に白く、風切羽や尾羽が黒い。頭部は淡黄色。ヒナから2歳ごろまでの若鳥は全身黒褐色で、成鳥羽になるまでは7～15年ほどかかる。
- ・繁殖期は10月～翌年5月。
- ・巣立ち後3～4年で巣立った場所に帰ってくる。5歳前後から繁殖に参加するが、巣立った場所で繁殖を行う傾向が強い。

#### アホウドリの小笠原再導入

現在、アホウドリのふたつの繁殖地のうち、鳥島は活火山であり、万一噴火があった場合には、アホウドリの個体群に大きな影響が出る可能性がある。もうひとつの繁殖地である尖閣諸島は、繁殖状況の調査や保護活動を行うのが難しい現状である。このため、過去にアホウドリが繁殖していたことが知られている場所から1カ所を選んで、アホウドリの営巣地を復活させることで、本種の復活を一層確実にすることが望ましいと考えられた。このため山階鳥類研究所では、生まれた場所に戻って繁殖するというアホウドリの習性を利用して、ヒナの移送により小笠原群島智島に繁殖地を作ることとした。2008～12年の5年間に合計70羽のアホウドリのヒナを鳥島から智島に移送して人工飼育し、69羽を巣立たせた。智島の飼育地には2009年から野生のアホウドリの飛来が観察されるようになり、2011年からは人工飼育した個体の帰還が認められた。2012年11月14日には、2008年に巣立ちした人工飼育個体（色足環番号Y01、オス）と野生個体（足環なし、メス）の間に初めて産卵が確認され、2016年には同ペアから初めて巣立ちヒナが確認された。

なお2014年5月に、智島から約5キロ南のなこうどじま媒島において、人工飼育個体（2009年巣立ち、色足環番号Y11、メス）と鳥島で生まれた年齢不詳のオスとの間で1羽のヒナが誕生したことが確認されている。また2016年5月には智島から約22キロ南のよめじま嫁島でヒナ1羽が確認されている。このヒナの親鳥は不明だが、山階鳥類研究所がこの事業で人工飼育して巣立たせた個体、あるいは同事業で誘引された個体と推察されている。

この事業は、(公財)山階鳥類研究所が、環境省、東京都、米国魚類野生生物局、三井物産環境基金、

公益信託サントリー世界愛鳥基金等の支援を得て実施している。

### 尖閣諸島のアホウドリ

従来同種と考えられてきた、鳥島と尖閣諸島に由来するアホウドリは、近年、遺伝的・生態的・形態的な違いから別種と考えるのが妥当という結論が得られており、両者は、それぞれの独自性を保つように保全していくべきと考えられる。このため、アホウドリはこれまで考えられてきたより希少な種となり、二つの個体群の実態解明を急ぐとともに、引き続き動向をモニタリングする必要がある。具体的には鳥島の個体群（「アホウドリ」）についてモニタリングを継続するとともに、20年以上調査が行われていない尖閣諸島の個体群（「センカクアホウドリ」）の現状について早急な調査の実施が望まれる。

「アホウドリ」と「センカクアホウドリ」を2種と考えるべきことについては下記プレスリリースを参照。

特別天然記念物・アホウドリに2種が含まれることを解明

（北海道大学・山階鳥類研究所 2020年11月20日）

[https://www.yamashina.or.jp/hp/p\\_release/images/20201120\\_prelease.pdf](https://www.yamashina.or.jp/hp/p_release/images/20201120_prelease.pdf)

（以上）